

KOBEの本棚

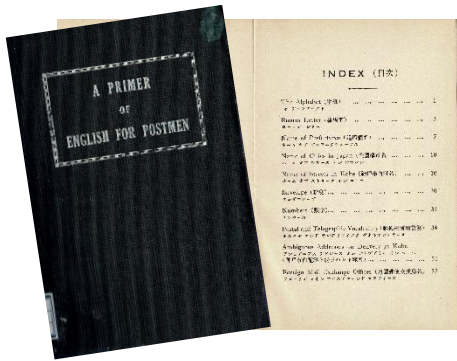
—神戸ふるさと文庫だより—

第105号 2023年（令和5）11月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL : (078)371-3351 FAX : (078)371-5046



『A PRIMER OF ENGLISH FOR POSTMEN
=集配人英語集』



(上) 「商業と金融の中心をなす栄町通」

『[神戸絵はがき集]より
全盛期、栄町通には「金のこはぜ（足袋の留め具）」が
落ちていと噂されました



くかくす

(左) 『神戸市内郵便区畫圖』

大正4年刊

栄町通と郵便配達

元町通の浜側を走る栄町通は、明治六年に幅八間[※]という当時では途方もなく広い道路として造られました。この頃の元町通は幅三間ほどで、基幹となる東西道路が必要とされました。完成すると、銀行、保険会社などの近代建築の社屋が立ち並ぶ経済の中心地に発展し、「東洋のウォール街」と呼ばれるほどの繁栄ぶりでした。

明治四十三年には市街電車（後の神戸市電）が開通し、栄町通を走りました。栄町通の西端、六丁目に神戸郵便局（現・神戸中央郵便局）があり、開通当初から郵便配達員は公務中の市電の無賃乗車が許され、配達の大きな助けになったといえます。大正十五年に神戸郵便局が発行した『A PRIMER OF ENGLISH FOR POSTMEN』

『集配人英語集』という資料があります。目次はアルファベットの説明から始まり「郵便電信用語集」「神戸市内配達上紛^{まき}ララシキ宛名」などがあり、英語が必須な神戸の配達員が苦心して編集し、当時、業務に携帯していたであろうものです。小さな冊子を手にとると、百年の重みを感じます。

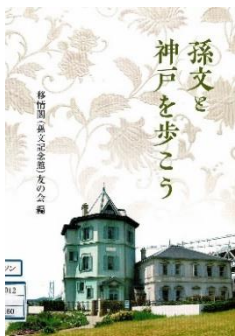
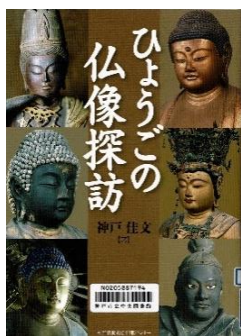
参考：『神戸ゆうびんの道順 百年史』ほか

※一間は、約一・八メートル

ひょうごの仏像探訪 神戸佳文（神戸新聞総合出版センター）

兵庫県立歴史博物館の学芸員として約四〇年間勤めてきた著者が、二〇一七年に同館で開催された特別展「ひょうごの美ほとけ」をベースとして、記憶に残る仏像との出会いや、調査研究の過程の余話を語る。

阪神・淡路大震災で救出された川西市の仏像、京都の三十三間堂から移された加東市の仏像、忿怒の形相を見せる佐用町のイケメン不動など、多彩な魅力を表情豊かな仏像たちの写真とともに伝える。ドラマティックなエピソードや遠く離れた仏像同士の意外な繋がりは、知れば知るほど興味深い。



孫文と神戸を歩こう 移情閣（孫文記念館）友の会編（孫文記念館）

中国民主革命の立役者である孫文は神戸を一八回訪れている。大正二年（一九一三）三月には華民国前大統領として来神。また同年八月には袁世凱政権に追われる「お尋ね者」として、川崎造船所の岸からひそかに上陸した。

本書は、神戸市内で孫文が立ち寄った場所などのゆかりの地を案内するとともに、それらを訪れる際のモデルコースをいくつか紹介している。

地図で読み解く阪急沿線 上田登（三才ブックス）

阪急電鉄の歩んだ歴史や沿線の不思議を満載。精緻な地図や写真などがイメージを膨らませる。

神戸線の敷設により社名を阪神急行電鉄（阪急）に改称した事情、路線開通から三宮への乗り入れに一六年かかった理由、神戸本線の直線区間の例外となる御影駅東側のカーブの謎、当初予定されていたなかった新開地駅が神戸高速線に誕生した経緯など、阪急電車に親しみのある神戸っ子の興味をそそる。

骨董病は治りません 武田良彦（神戸新聞総合出版センター）

神戸市内の骨董店で古伊万里のそば猪口（ちまぐち）を見かけ、「日本酒を飲んだらうまいだろうな」と思ったのが骨董との出会いと言う。以来、骨董にとりつかれた著者は、出石焼の徳利、政治家の書など、数々の品を収集する。別々に購入した二つの肖像画が夫婦と判明するなど、元新聞記者の著者による調査は入念で、品物の来歴や価値、真贋をつきとめていく様子をユーモアを交え語っている。

竜馬ときらり 松宮宏（神戸新聞総合出版センター）

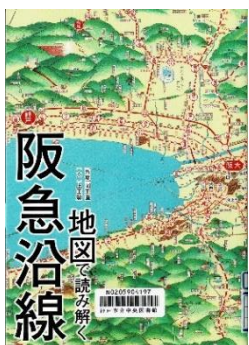
この小説の主人公、新谷きらりは、幼少期に「歴史の沼」にはまって以来、坂本竜馬をこよなく愛している。ある日きらりは、写真部の活動中に撮った写真に幕末の神戸の風景が写っていることに気がつく。神戸海軍操練所に集った志士たちと現代を生きるきらりがつながり、交錯していく不思議な物語がそこから始まる。

きらりが歴史を紐解いていく場所として神戸市立中央図書館が登場する。ぜひ注目されたい。

神戸市史紀要「神戸の歴史」第二十八号 神戸市文書館編集・発行

本号では文書館が保存している歴史的公文書を基にした神戸市政に関する研究成果をまとめている。巻頭論文では、市制の公布（明治二十一年）と度重なる改正を契機として、明治憲法下で神戸市の議決機関と執行機関が成立していく過程を整理し、「市参事会議事録」、歴代市長の「事務引継書」等の公文書を調査して明らかにしたことを解説する。

また『神戸市民時報』を分析調査し、空襲への備えや啓発の取組と、現在のコミュニティ活動にもつながる町内会・隣保組織の成立と活動実態を解明している。



ランプシェード 「じゅもとじょかん」
連載エッセイ 1979～2021 松岡享子
(東京子ども図書館)

東京子ども図書館の礎を築いた著者が、同館の機関誌「こどもとじょかん」に連載したエッセイをまとめたものである。著者は神戸生まれで、子どもの文学とはどうあるべきかを追求・体現した児童文学者である。

のちに「すべての始まりであった」と語るアメリカの公共図書館での体験や石井桃子らとの思い出、書評、身辺雑記などが書かれている。本の力を信じ、その豊かさを子どもたちに伝えようと精力的に働いた著者の人生を知り、数多くの子どもたちを楽しませてきた翻訳や創作の源に触れる思いがする。



関西学院のエスプリを追って カナダ、アメリカ、ラトビアへ 池田裕子 (関西学院大学出版会)

関西学院大学の学院史編纂室で二五年勤務した著者が、学院に残された古い資料を紐解き、宣教師の子孫を探し出すなど関係者との交流を深め、丹念な調査で新たな事実を明らかにしてきた記録。

ラトビア人教師イアン・オゾリン(一八九四―一九五九)の調査を巡っては、彼が大正時代に学院の英語教師をしていたことを著者の論考によって在日ラトビア大使が知ることとなった。その後歴代三名の在日大使が関西学院大学で講演会を行うなど、ラトビアとの新たな交流を生み出すこととなった。

|| その他の新刊 ||

神戸みなと食堂 土田康彦 (托口出版)
神戸市真野地区に学ぶこれからの「地域自治」 地域のことは地域で決める、地域の者は地域で守る 乾亨 (東信堂)
平生フィロソフィ 平生飢三郎の生涯と信念 吉沢英成 (甲南大学出版会)

神戸 その28
あんな人こんな人

坂野 惇子 ばんの・あつこ
大正7年(1918) ~ 平成17年(2005)



坂野惇子は、ベビー・子ども用品を扱う神戸のアパレルメーカー「ファミリア」の創業者です。繊維・輸入雑貨卸売業「佐々木営業部」の創業者、佐々木八十八の娘として魚崎で生まれ、裕福な家庭で大切に育てられました。結婚後は生まれた子どもと共に穏やかな生活を送りましたが、戦争によって家を失い、さらに戦後は預金封鎖や莫大な財産税、物価の高騰などで苦しい生活を強いられるようになります。そんな中、父の右腕で、惇子の兄のような存在でもあった尾上清の「自分の手で仕事をし、自分の力で生きていく、一労働者になりなさい」という言葉もあり、生計を立てるために働くことを決意した惇子は、昭和23年(1948)12月に、女学校時代からの友人の田村江つ子を含む女性4人で、「ベビーショップモトヤ」を開業。西洋式の育児方法に基づいたベビー・子ども用品を販売します。彼女らが「子どもたちのためによりよいものを」と心を込めて作った商品は品質の高さから評判となりました。昭和25年(1950)には社名を「ファミリア」とし、本格的な事業としてスタートさせて、今や日本のみならず海外にも知られる会社となりました。惇子は半世紀もの間会社を支え続け、80歳を迎えた平成10年(1998)3月に第一線を退きました。まだ女性が社会で働くことが少なかった時代において、女性の社会進出の先駆けとなり、彼女の活躍は働く女性たちの地位向上に大きく貢献しました。

【参考】『ファミリア30年のあゆみ』河井昭編(ファミリア, 1980)、『ファミリア50年のあゆみ』早瀬弘編(ファミリア, 2000)、『上品な上質』ファミリア編(ダイヤモンド・ビジネス企画, 2015)ほか

【写真】『坂野惇子 子ども服にこめた「愛」と「希望」』青山誠著(KADOKAWA/中経の文庫, 2016)

舞子浜の砂の下



現在の舞子浜の松林

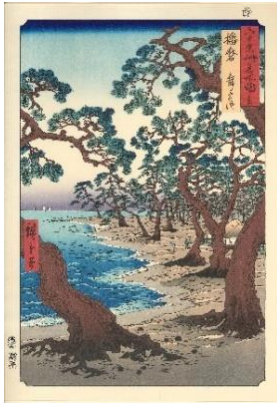
明石海峡大橋が開通して、今年で二五周年をむかえました。その神戸側の橋のたもとには、明治三十三年（一九〇〇）に開園した舞子公園があり、一帯に舞子浜が広がります。

「舞子」という地名の由来には諸説あります。『須磨・舞子・明石遊覧案内』（一九一六年刊）には、「紀淡海峡の潮流此海岸に舞込み来るを以て舞込みの濱と云ふが轉化せし」や「平相國清盛一日此濱邊に遊び童兒に舞を奏せしめたる事あり故に」などと紹介されています。『兵庫県大百科事典』では、「千姿万態の磯馴松の姿が舞子（妓）の舞う姿に似ていたから」とあります。

また、「はりまなる舞子の浜に女らが舞てふ袖のすゞしくも見ゆ」とい

う歌が『播磨万宝智恵袋』第二一卷に収録されています。これは、赤松了益（一五三四〜一五九五）によるもので、戦国時代末期から安土桃山時代頃にはすでに「舞子の浜」として知られていたことがわかります。舞子浜周辺は古くから絵画や文学などの題材として取り上げられてきました。『万葉集』では、柿本人麻呂が「明石大門」「明石の門」と明石海峡を歌っています。

近世には、『平家物語絵巻 巻第四』に、高倉上皇が山田の浦（西舞子）に入港したところが描かれています。一立齋広重（歌川広重）が描いた「播磨舞子の濱」（『六十余州名所図会』）もあり、『播州名所巡覧圖繪』には絵画とともに「名高き事、天下に聞へたり。是正に、砂色、松の翠色、物に異なるが故也」とあります。江戸時代には風光明媚な土地として有名だったようです。



「播磨舞子の濱」
『六十余州名所図会』

明治時代には、徳富蘇峰が「舞子灣の落日」の中で、「舞子の勝は春夏秋冬、皆宜し、朝昏昼夜皆宜し」と称賛しています。

このように白砂青松で有名な舞子浜ですが、その松や砂の下には、遺跡が広がっており、歴史はさらにさかのぼることが出来ます。舞子浜遺跡と呼ばれ、昭和三十五年（一九六〇）に初めてその存在が確認されま

した。舞子公園東端から、下水道工事中に偶然、四世紀後半の埴輪棺が発見され、中からほぼ完全な人骨が出土しました。その時の踏査で、周辺にも棺があることがわかり、注目されました。埴輪棺とは、通常古墳に立て並べる埴輪を横に寝かせ、棺として利用したものです。『たるみの遺跡』によると、舞子浜遺跡のもの多くは、円筒埴輪や朝顔形埴輪、盾形埴輪を二本連結し、中に人を埋葬し、蓋形埴輪などで両端を塞いでいます。また、連結部や透かし孔には埴輪片を置き、その上を粘土で丁寧に覆って、棺内に砂が入らないようにしています。

その後の発掘調査で、現在までに合計一九基の埴輪棺が出土しています。『祖先のあしあと』によると、公園内全体に多数の埴輪片が分布し



舞子浜遺跡の埴輪棺
(神戸市文化財課提供)

ているため、二〇〇三〇基あると考えられるとのことです。

今までに出土した人骨から、舞子浜遺跡には二〇〇六〇歳代の男女という様々な人が埋葬されたことがわかっています。棺に使われた埴輪は近くにある五色塚古墳に立つ埴輪と同じ職人集団によって作られたため、埋葬された人々は五色塚古墳の被葬者と何らかの関わりがあったと考えられています。

しかし、発掘調査が行われたのはほんの一部です。舞子浜に行くと、周辺の松林や対岸の淡路島、明石海峡大橋に目が行きがちですが、足元にはまだまだ棺が埋まっていると考えられています。

参考文献

『舞子浜遺跡・県立舞子公園整備工事に伴う発掘調査報告書』、『蘇峰文選』、『兵庫県立舞子公園百年史・明石海峡を見つめて』ほか